

厚木市史たより 第13号

平成27年12月1日

題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

古代厚木の人々の信仰

厚木市史編集協力者 永井 肇

1 はじめに・・・山の信仰と大山

科学技術が進歩した現代においても、わたしたちはしばしば自然の脅威になす術を失ってしまふ。これから述べようとする奈良・平安時代の人々は、現代以上にさまざまな場面面で神仏にすがってくらしの安寧を願ったことであろう。

日本人は古来、山・海・川などの自然に抱かれて生活してきた。特に国土の約七割を占める山は人々の宗教生活に大きな意味を持ってきたという。その中でも、大和の三輪山に代表される美しい山や阿蘇山など噴煙をあげる火山は霊地として崇められてきた。このように霊山といわれるものは全国に数多くみることができる。

すでに縄文時代には、狩猟や採集の生活が営まれ、こうした生活の資を与えてくれる森や山への信仰が育まれた。その後、弥生時代にはいっ



図1 愛名宮地遺跡全景（『厚木市史』古代資料編(2)）

て水田耕作が営まれると、山は水を与えてくれる山の神や祖霊の鎮まる所とされるようになった。また奈良時代のことを記した『続日本紀』にはこうした山に祈りを捧げる史料が登場する。八世紀初めの数年を見ただけでも、「使を京畿に遣し、雨を名山大川に祈らしむ」（文武天皇二年五月甲子条）、「幣帛を諸社に奉り、雨を名山大川に祈らしむ」（大宝元年四月戊午条）など、多数認められる。

厚木市内から望まれる大山も霊山の一つにあげられる。昭和三十五年と四十年の山頂の阿夫利神社付近の発掘調査・採集では、縄文土器や須恵器、土師器、平安時代の青銅製の五層小塔や土製の仏座像も見つかっている。そして、山麓には広い範囲にわたって寺院跡や神社など、信仰の跡をみることができよう。

2 愛名宮地遺跡

古代の厚木地域は、相模国愛甲郡と大住郡の一部に属していたことが『倭名類聚抄』などから知られるが、人々の具体的な生活をうかがわせる文献史料はまったくないと言ってもよい。そこで、当時の人々のくらしや信仰を考えようとするとき、まずは考古学的成果に頼らなくてはならない。

初めに取り上げなくてはならないのが愛名宮地遺跡（図1）である。この遺跡は、恩曾川と玉川に挟まれた中津山地末端、高松山山麓の谷戸に立地する古墳時代から近世にわたる複合遺跡である。遺跡中央部に、礎石建物跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などからなる平安時代の遺構が集中的に営まれているが、そのうち基壇をもつ一間×三間の礎石建物跡（一号寺院址）からはおびただしい数の灯明皿や四十五点の瓦塔片、瓦鉢（鉄鉢形土器）、鉄製釘、「寺」と記した墨

書土器などの遺物が発見された。また、その真下からは掘立柱建物跡（二号寺院址）の遺構も見つかっており、八世紀末から九世紀末の約百年間に相当する仏堂だったことが分かる。

瓦塔は仏教信仰と関連する考古学遺物である。地域の有力者が宗教的な権威を得る手段の一つとして、滅罪のための造塔の動きが地方に広がっていく。一方で、それには大きな財力を必要とするので、その代用品である瓦塔を作ったと思われる（笹生衛「瓦塔の景観と滅罪の信仰」瓦塔が建てられた景観と経典との関連を中心に）『日本古代の祭祀考古学』二〇一二年）。

愛名宮地周辺には、下古沢、温水などに集落の跡が確認されている。規模はそれぞれ違っても、愛名宮地遺跡はこの集落に住む人々の信仰の拠点になっていたと考えられる。

一方、下萩野中三嶽遺跡からは、油煙の付いた完形での土師器が多数出土している。油は当時高価なものであり、一般の農民が容易に手に入れられたとは考えにくいので、寺院における万灯会の存在が推測される。ここで連想できるのは、平安期時代初期に薬師寺の僧景戒が著した日本最初の仏教説話集である『日本霊異記』にみえる河内国安宿郡（現在の大阪府羽曳野市・藤井寺市東部）の信天原の山寺での説話である。信者たちが例年灯明を捧げて、銭や財物を布施したことが述べられており、信者たちの寄進による山寺の造営や維持が行われていたことが想像できる。大量の灯明皿の出土は、法会の開催や信者たちの献灯を物語るものであろう。

3 鐘ヶ嶽と修験道

愛名宮地遺跡から北西に約五キロ行った大山東麓に位置する鐘ヶ嶽（七沢）は、山頂付近に浅

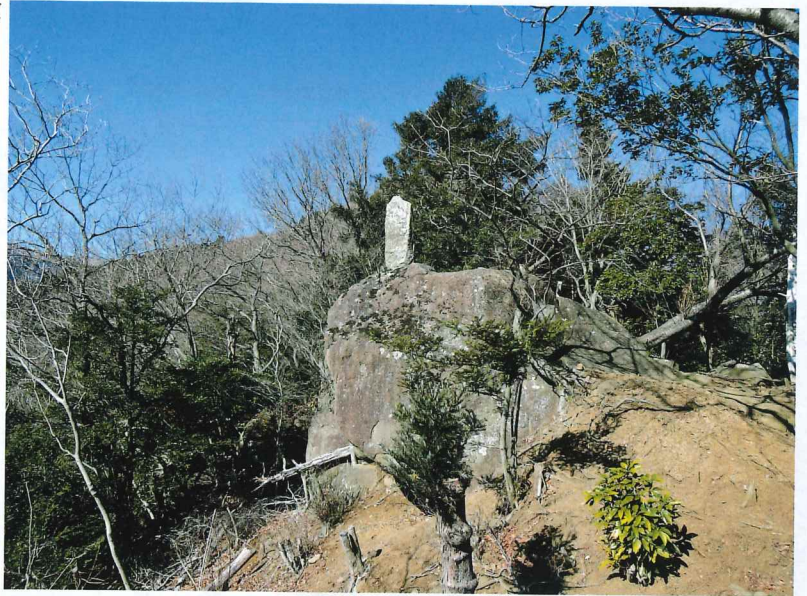


図2 鐘ヶ嶽山頂付近 (七沢)

間神社が祀られていることから浅間山ともいわれる標高五六一メートルの山である。今日でも修験道の巡礼地であり、参詣者のために一丁目から二十八丁目の道標が立てられている。この山の中腹の標高三三〇メートル付近(十七丁目あたり)の参道から多くの布目瓦が見つっている。正式な調査が行われていないために、遺構については明らかでないが、採集された布目瓦には、九世紀後半から十世紀の、南多摩瓦窯産と考えられる素縁素弁六葉蓮華文軒丸瓦が認められる。また、「上」の模骨文字がみえる平瓦や鉄製釘も出土している。さらに平成二十七年一月から二月に行われた調査でも、平安時代の地層から瓦や土師器の破片とともに鉄滓が出土した。特に鉄滓の存在は、付近に何らかの鍛冶施設の存在が想定される。平成十年に刊行された『厚木市史』古代資料編(2)は、

布目瓦出土地点に寺院址関連の伝承は無いとしながらも、「平安期における大山山麓をめぐる山岳信仰関連遺跡のひとつであった」と推定している通り、相模の古代寺院・山岳寺院を考える上で重要である。

鐘ヶ嶽から北東に十数キロ行った愛甲郡愛川町南東部に位置する八菅山は、県内有数の経塚遺跡でもあると共に、古くから修験道の道場として知られている。丹沢・大山をめぐる大山修験、日向修験とならぶ修験霊場の一つである。八菅山を起点に、鐘ヶ嶽を経て大山の白山不動までの丹沢山塊を三十五日で巡る、お峰入の荒行で栄えたようである。

4 恩名片岸遺跡(尼寺原)

恩曾川の北岸(左岸) 尼寺原へ登る谷戸の東山麓に立地するのが恩名片岸遺跡である。当地の伝承としては、江戸時代の天保年間に成立した『新編相模国風土記稿』には「乗尼寺とみえ、他の資料では、聖徳太子の建立、または神亀年間開創とみえる。平成九年の調査では、縄文土器などのほか、平安時代の堆積土中から須恵器、土師器に交ざって平安時代の多数の一枚作りの瓦片が出土した。この発掘調査の結果、かつて台地上に瓦を葺いた建物の存在があったと指摘できる。

その他にも市域には村人の信仰の跡をうかがわせるものをいくつかみることができ、及川宮ノ西遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居跡から見つかった奈良三彩の小破片、恩曾川と玉川に囲まれた長谷丘陵の西南に位置する小野若宮遺跡から出土した平安時代の約六十片の布目瓦片などがあり、その中には「講」の墨書を持つものも出土している。さらに、飯山湯気沢から「証」の則天文字だと思われる銅印が見つかっており、これが仏教信仰を示す遺物とみられることもできる。則天文字とは、中国の則天武后が制定し、使わせた十七字の漢字で、七世紀末に制定され、七〇四年まで使用された。中国本土だけでなく、周辺の漢字文化圏にも広がり、日本でも特に八〇九

世紀に墓誌や碑文、墨書土器などにその例がみられ、一般集落ではない官衙や寺院跡での出土例が多い。

5 山林寺院は山の中か?

さて、愛名宮地のような仏堂を伴う施設は山林寺院と称され、近年各地でその事例が発掘、研究が行われており、県内でもこれまでいくつかの調査結果が報告されている。

まず厚木市と同じ当時の愛甲郡域では、清川村に宮ヶ瀬遺跡群馬場遺跡がある。この遺跡は、東丹沢山間部、中津川と川弟川の合流地点付近に形成された山裾の河成段丘上の斜面上に立地する。山裾の緩斜面を段切りして造り出した平坦面に築かれた礎石建物(二間×三間)跡からは灯明皿が出土している。付近の竪穴住居跡や土坑からは、「寺」と記した墨書土器や土師器甕を転用した香炉などが出土しており、これが仏堂だったと考えられる。この仏堂は、九世紀前半から九世紀末まで存続したようであるが、周辺には同時期の集落が展開しており、仏堂はそれらを見下ろす高台に造られていることから、集落のシンボリックな存在だったと思われる。その他、当時は武蔵国になるが、川崎市麻生区の宮添遺跡など山林寺院と考えられる遺跡はいくつか認められる。

さて、山寺とか山岳仏教というと、私たちは平安時代の最澄や空海の活動をイメージするが、僧侶としての呪力を高めるために山間部で修行する僧はそれより遡る。すでに七世紀には、山林で修行することで験力を体得することをめざした僧尼が現れており、奈良時代には律令国家も官寺僧が山林寺院で修行の実践を積むことを期待するようになったといわれる。山中や山房を中心とする山林仏教は、官大寺や国分寺の国家仏教と対立するものでなく、むしろそれらと切り離すことができないう結びつきを持っており、このことは、養老令の『令義解』僧尼令の禅行条などの規定からも裏付けることができる。ところで、山寺を規定するのは、僧尼の禅行修行にふ

さわしい環境、俗地との隔絶性があげられる一方で、それだけでは論じられないといわれる。『日本霊異記』にみえる大和国葛木上郡の高宮山寺の僧の願望は、「毎日朝早く寺を出て里に行き、夕方に房に帰り住むのを常のこととしていた。」と書かれており、山寺の修行僧が村と交流を持っていたことが分かる。さらに、鈴木景二氏も官大寺僧や国分寺僧がこれらの山林寺院との間を往来していたことを明らかにしている（『都鄙間交通と在地秩序―奈良・平安初期の仏教を素材として―』『日本史研究』三七九号 一九九四年）。

6 山林寺院における信仰

それでは、これらの山林寺院では具体的にどのような信仰が行われていたのだろうか。ここでは文献史料を中心に考えていきたい。当時の信仰の跡をうかがわせるものは、先にあげた『日本霊異記』にみえるさまざまな説話があるが、ここに登場する信仰に悔過がある。悔過とは、仏や観音などに対して自らの罪過を懺悔することであり、罪報を免れようとする儀礼である。七世紀には祈雨・止雨や天皇の病氣平癒祈願など、個別の事態に対処するための臨時的な性格であったといわれる。村落の有力者が建立したこのような寺院（仏堂）では、祖先の追善供養のほか、地鎮、招福、除災、村落・一族の繁栄などさまざまな現世利益を願う信仰が行われたが、八世紀になって恒例化したようである。天平十七年（七四五）に、「又京師畿内の諸寺及び諸名山の淨処をして、薬師悔過の法を行わしむ。」（『続日本紀』天平十七年九月癸酉条）とみえる。また、笹生衛氏は八世紀末にこうした山林寺院が成立・展開する理由を光仁・桓武朝における浄行禪師優遇策としてとらえている。つまり、道鏡政権のもとでの仏教政策を変更して山林修行を認めた『続日本紀』宝龜元年十月丙辰条などを根拠にして説明している（『古代仏教信仰の広がり』『神仏と村景観の考古学』二〇〇五年）。この時期はまさに愛名宮地が成立する時期と符

合する。

ただし、山林寺院における信仰を悔過会による現世利益の追求だけに限定することはできない。神奈川県内でも近年の発掘調査の進展で、郡家など官衙跡の近くで祭祀に関わる遺構や遺物が発見されている。代表的な例としては、高座郡家跡としてさまざまな発掘成果をあげている茅ヶ崎市下寺尾の西方A遺跡に近い小出川河川改修事業関連遺跡をあげることができる。ここでは斎串や絵馬、皇朝銭、人面墨書土器などが祭祀場と思われる遺構から出土しており、神仏習合的な祭祀が行われていたと考えられる。また、小田原市の足下郡家との関連が指摘される千代廃寺周辺では、「吉」・「福」などの吉祥句のほか、「人」・「生」の則天文字を書いた墨書土器がやはり祭祀場と思われる遺構から出土している（『平成二十六年度かながわの遺跡展・巡回展「発掘された御仏と仏具―神奈川県古代・中世の仏教信仰―」二〇一四年』）。寺院などからしばしば出土する「万」などの吉祥句を書いた墨書土器は、厚木市の鷹尾遺跡でも発見されている。これらは道教信仰にもつながるといって可能性もあり、多面的にとらえる必要がある。道教思想は、二世紀頃の中国に起源が求められるもので、不老長生を願う神仙思想や儒教、仏教、さまざまな民間信仰などが融合した考え方である。

7 なぜ相模国の国分寺と国府は離れているのか？

国分寺は、正式名称を「金光明四天王護国寺」といい、天平十三年（七四一）に聖武天皇の発願によって、国分尼寺（法華滅罪之寺）とともに全国に設置された官寺である。相模国分寺は、海老名市に所在し、これまでの発掘調査で多くのことが解明されている。一方、国分尼寺は、国分寺の北方約七〇〇メートルの台地上にあるが、まだまだ明らかになっていないことは少ない。

さて、『続日本紀』には、国分寺においても悔過が行われていたことが分かる。神護景雲元年一月己未条には、

「勅すらく。畿内七道諸国、一七日の間、各国分金光明寺において、吉祥天悔過の法を行え。」とあり、その功德によって気候も安定し作物も順調に育つであろうと述べている。そして、宝龜三年十一月丙戌条にも、「風雨不調、頻年飢荒」のため、諸国の国分寺において、毎年正月一七日の間、吉祥悔過を行うことを恒例とするように命じている。時代は下るが、『延喜式』（玄蕃寮）には、毎年正月八日から始める修正会、吉祥悔過や安居における最勝王経の講読などについて規定がみえる。相模国分寺でもこうした法会は周辺の山林寺院と連携しながら行われていたのではないだろうか。

ところで、国分寺は国府に近いのが一般的であるのに、対して、相模国の場合はあてはまらない。相模国府は、近年の発掘調査の結果、平塚市四之宮付近に求める説が有力であり、国分寺はそこから十キロあまり離れている。



図3 史跡相模国分寺跡(海老名市)から望む大山

当時の行政区分でも国府が大住郡であるのに対して、国分寺・国分尼寺は高座郡であり、郡域を異にするのは稀である。

しかし、これまでの検討を通して、この疑問について、解決する見通しができたように思う。すなわち、相模の場合、霊山としての大山を中心にさまざまな宗教施設を置き、僧侶たちのネットワークが図りやすいことを意識したことが大きな理由ではないだろうか。

8 神祇信仰と大山

ここまで仏教信仰との関係を見てきたが、神祇との関わりにも注目したい。大山周辺には国家が認定した式内社が集中しているのである。相模国の式内社は十三座であるが、そのうち半数以上が大山を仰ぎみるところに集中している。当時の愛甲郡には厚木市の小野神社(図4)一座だけであるが、大住郡には大山の阿夫利神社をはじめ、三ノ宮の比々多神社(伊勢原市)、高部屋神社(同市)、四ノ宮の前鳥神社(平塚市)がそれぞれ鎮座している。そして高座郡には、一ノ宮の寒川神社(寒川町)のほか、海老名市の有鹿神社や大和市の深見神社などが存在する。東国の入口で要衝とみられた足上郡・足下郡の二郡には足上郡の寒田神社が存在するだけであり、鎌倉郡、三浦郡には一座もみえないことを考えると、この地域に偏在することは特徴的だと言える。

このうち、海老名市の相模川左岸に位置する有鹿神社では、今も水にまつわる水引祭(水もらい神事)という神事が続いている。記録に残るのは、室町時代末期であるが、相模原市にある「奥宮」周辺では四世紀頃の銅鏡や管玉などが発見された祭祀遺跡が確認されており、実際はそれよりはるかに遡る可能性もあるという。農耕に欠かせない水と関連する祭祀が行われていることは大山の信仰との関係を示唆している。



図4 小野神社(小野)

9 大山信仰ネットワークの存在

最後にもう一度、大山周辺の信仰の跡を探ってみよう。まず、現在の伊勢原市には日向薬師がある。宝城坊ともいわれ、「日向薬師縁起」によれば、元正天皇の霊亀二年(七一六)行基の開基という伝承を持つ。本尊の薬師如来両脇侍像は、十世紀後半の鈍彫一木造の仏像であることから平安時代には建立されていたと考えられる。また、秦野市側からの大山登山口にあたる糞毛には宝蓮寺がある。この奥院にある不動明王は秦河勝がこの地に下って安置したという伝承を持ち、秦野市の名前の由来にもなっている。

久保智康氏は、北陸白山を仰ぎ見る越前・加賀をフィー

ルドに研究している。氏は、発掘調査の結果によって、この地域で、八世紀後半から九世紀にかけて、文献に現れない中小の寺院が数多く建立され、しかもこうした寺院遺構は、決して人里離れた山奥ではなく、意外なほどに里に近いところに立地することを明らかにし、これを「里の山の信仰空間」と名づけた。山林修行者は、自らの呪術を用いた雨乞いや病氣平癒など現世利益の成就、造寺・造仏や写経・架橋などの智識を募るにも、里へ出て在地の有力者や民衆と常に関わる必要があったというのである(久保智康「国府をめぐる山林寺院の展開」『朝日百科 日本の国宝別冊3』一九九九年)。

この景観と論理は、ここ相模にもそのまま当てはめられると思う。相模では大山を中心にして、その周辺に信仰の空間が形成されていたのであり、国分寺を中心とした大山麓に点在する山林寺院では、悔過をはじめとするさまざまな法会や儀式が催されていたのではないだろうか。

そこで、これを大山信仰ネットワークと定義したい。信仰の山を中心に、その山麓に所在する山林寺院と国分寺や集落の寺院とを僧侶が往来してネットワークを形成する社会があったと考えられ、それは神社をも含みこむ信仰の空間であったのである。

厚木市史たより 第13号

平成27年12月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三二一七-一七

電話 〇四六-二三五-二〇六〇

FAX 〇四六-二三三-〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。